

自由の使い途

奨励	竹ヶ原 政輝〔たけがはら・まさてる〕
奨励者紹介	日本キリスト教団丹波新生教会牧師

「すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。「すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではなく、自分の利益ではなく他人の利益を追い求めなさい。市場で売っているものは、良心の問題としていちいち詮索せず、何でも食べなさい。「地とそこに満ちているものは、主のもの」だからです。あなたがたが、信仰を持っていない人から招待され、それに応じる場合、自分の前に出されるものは、良心の問題としていちいち詮索せず、何でも食べなさい。しかし、もしだれかがあなたがたに、「これは偶像に供えられた肉です」と言うなら、その人のため、また、良心のために食べてはいけません。わたしがこの場合、「良心」と言うのは、自分の良心ではなく、そのように言う他人の良心のことです。どうしてわたしの自由が、他人の良心によって左右されることがありましよう。わたしが感謝して食べているのに、そのわたしが感謝しているものについて、なぜ悪口を言われるわけがあるのです。だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、あなたがたは人を惑わす原因にならないようにしなさい。わたしも、人々を救うために、自分の益ではなく多くの人の益を求めて、すべての点ですべての人を喜ばそうとしているのですから。わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。

（コリントの信徒への手紙一 10章23節―11章1節）

忘己利他

「忘己利他（もうこりた）」という言葉があります。「己を忘れ、他を利する」と書きますが、天台宗の開祖・最澄の言葉だそうです。世界宗教と呼ばれる大きな宗教には、ほぼ共通してこのような考え方があるだろうと言う人もいますが、確かにそうかもしれません。今日の聖書の箇所にも、このことを言っていると思える言葉があります。

「だれでも、自分の利益ではなく他人の利益を追い求めなさい」（24節）。天台宗の公式ホームページで「忘己利他」という言葉が紹介されているコーナーには、マザー・テレサのインドでの体験が取りあげられています。貧しい家族に食料を届けたところ、自分たちが食べるのにも十分とは言えないのに隣の家族にそれを分け与えたという話です。これが「忘己利他」の精神だということでしょう。これを少々ひねくれた見方をすれば、インドの人びとがもっている高い道徳性にキリスト教の人も驚いたということが言いたいのかなと、そんな風に思えないわけでもありません。私自身、タイの仏教徒やネパールのヒンドゥー教徒との出会いからいろいろと考えさせられる経験をしてきましたが、しかし、どの宗教が道徳的に優れているかを張り合おうなどという気は、少なくとも私にはありません。

今日の箇所にあるパウロの言葉には、確かに「忘己利他」の精神に共通するものが表れていると言えますが、パウロはこれを道徳の問題として言っているわけではないでしょう。パウロにとって、それは信仰の問題であり、これらの言葉を含む「聖書」も倫理や道徳の教科書というわけではありません。今日の箇所の中心的なメッセージが「自分の利益ではなく他人の利益を追い求めよ」というところにあるにせよ、その背後にあるものを丁寧に見たいと思います。

肉は肉。

この箇所は、事前にコリントの教会から送られてきた手紙にあった質問にパウロが答えているところです。元の質問は、「偶像に供えた肉を食べてもいいか」というものでした。コリントの町にはギリシャ神話にその名が見られるような神々をまつる神殿がいくつもあって、そこで神々の像に供え物がされていました。当時の習慣では、そのお供えに使われた肉が像の前から下げられた後、市場で売られていたということです。25節に、「市場で売っているものは、何でも食べなさい」とあるのは、このような肉を食べてもかまわないということです。これらの肉は他の宗教の儀式で使われた肉ということになりますが、パウロは、そのこと自体を大きな問題とは考えません。パウロにとっては、ギリシャの神々の像というのは、あくまで人が造った像にすぎないものであって、その前に供えられた肉に何かの影響を与えるような、そういう力をもっているとは考えていないわけです。像は像、肉は肉、そういう考え方ができる。それは、パウロが「神々の像は人が造ったものにすぎない。本当の神は別におられる」という知識をもっているところから来る認識であり、そういうことを知っているからできる考え方だと言えます。

これは、パウロがある種の「自由」をもっているということだと思います。その肉がどういう流通経路を通ってきたかということにこだわる必要のない自由を、パウロはもっているわけです。その自由の根拠の一つとして、パウロは、この地上にある食べ物はあるが、神がお創りになったものだという信仰を挙げています。このパウロのもっている自由は、現代のクリスチャンも基本的にもっているものと言えるでしょう。

世の中には食べてはいけないものが決められている宗教もあります。何の制約ももたない人からすれば、そういった「こだわり」は、非常にバカバカしいものにも思えるのかもしれませんが。

パウロは、自分には食べてはいけないものはないという自由をもっています。コリントの教会には、それと同じ考え方をできる人と、できない人がいました。神々の像は像にすぎないと考えられる人、そういう知識をもっている人と、そうではない人。この両者の間に生まれた溝が大きな問題となって、コリントの教会の人びとはパウロにアドバイスを求めます。

できることをしない自由

この問題についてパウロ自身は、神々の像は「像」にすぎないという知識をもっていて、そこからくる自由をもっています。「真の神を知っているという知識は、私に自由をもたらしてくれている。ある人が考える『できない』、『してはいけない』ということから、私は自由だ。私にはそれができる。

しかし、できたとしても『すべてのことが益になるわけではない』」。パウロは、そう言います。ある種の知識と、そこからくる自由をもっている人には、食べ物に対するこだわりなどというものはバカバカしいものに見えます。それが、そのこだわりをもっている人自身をバカにすることにつながってしまうこともあるのだと思います。

コリントの教会では、知識をもっている人が傲慢になってしまっていたようです。自分は知識をもっている、「賢い」と思っている人のなかに傲慢さを見たパウロは、あなたがたは確かに自由をもっているが、その使い方に注意しなさいということを言います。それが「造り上げる道を選ぼう」ということであり、「自分の利益ではなく、他人の利益を追い求めよ」という勧めでした。

神々の像は像にすぎないものであり、そこに捧げられた肉も単なる肉、それを食べることに限してはとやかく言われる筋合いはない。これはパウロの基本的な考え方であり、実際、パウロはどんな肉でも食べることができます。しかし、「食べない」という判断を選ぶこともある。これをパウロの自由が制限されたと考える人もいるかもしれませんが、そうではなくて、彼は何を食べてもよいという「自由」を「食べない」という形で使っているだけです。

パウロは、何が自分たちを造りあげるか、何が教会という人間の群れを造りあげるかを第一に考え、そこから自分のとるべき行動を選択しています。その大きなテーマに比べて、「お供えの肉を食べてもいいか」ということは小さな問題かもしれませんが、しかし、その小さなことの積み重ねが、人の群れを造りあげていくということでしょう。食事の際、出されたもので食べてはいけないものはない、しかし、食べることがそこにいる誰かに悪影響を及ぼすと判断されるなら、食べない。そういう判断も必要だというわけです。こんなことに気を遣わないといけなんなんて、バカみたい、面倒くさい。そんな風にも思えるでしょう。しかし、「愛」というのは、人が共に生きていくうえで生じる「ちょっとした面倒くささ」を引き受けるという形でも表されるものではないでしょうか。

私たちが引き受ける「面倒くささ」というものは、キリストが私たちの救いのために引き受けてくださった十字架の苦しみと比べて、どれほどのものなのでしょう。自分はこうしたい、それができるのに何故してはいけない。なまじ自由をもっていると、自分は自由だと思うと、そんな考え方にとらわれるのかもしれませんが。しかし、パウロは、自分のしたいことよりも神の栄光を大事にします。いえ、この言い方は正確ではないかもしれませんが。パウロは、自分のしたいことを、神の栄光のためにという基準のなかで考えている、そう言うべきでしょう。

そこでパウロは「キリストに倣う」ということを言うわけですが、そこには十字架への道を歩まれたキリスト、苦難の道を選ばれたキリストということがあるでしょう。パウロにとっては、すべての行動の土台にこのキリストへの信仰がある。だから、「自分の利益ではなく他人の利益を求める」ということも単なる道徳の問題ではなく、ただ一人の主であるキリストへの信仰の問題であるわけです。

自由の使い途

自分に自由があるとして、その自由を何に使うか。それをパウロは問題にします。何でもできる体をもっているとして、何をしてもいいのか。何でも言える口をもっているとして、何を言ってもいいのか。この自由は何のためか。

そのことを真摯に考え続けたパウロは、実際に自由が奪われた時、どうしたでしょう。彼は、囚人として牢屋に入れられることもあります。その状態で書かれた手紙で彼は、「それでもわたしは喜んで」と繰り返し語っています。その彼が倣うというキリストは、十字架に手足を打ちつけられた状態で、残された自由で、その口で、自分を殺そうとする人びとの赦しを願われました。そして、そのキリストをこの世にお遣わしになった方、すべてを支配しておられ、何物にも妨げられない自由をおもちの全能の神は、その自由を私たちの救いのために使われました。ここに愛があります。この神の自由、キリストの自由、パウロの自由に倣おうとする。そのとき、本当に自由であるとはどういうことかということ、そして、その自由の使い途というのが見えてくる、そのように思うのです。

